『手話学研究』第 24 巻（2015 年）
3 ページ～ 16 ページ

＜特集記事＞

# アフリカろう者コミュニティによる手話言語研究の促進
## フランス語圏西・中部アフリカの事例

サノゴ・イェデ・アダマ [*1]　亀井 伸孝 [*2]
[*1]Society Without Barriers – Côte d'Ivoire (SWB-CI)
[*2] 愛知県立大学
swbci@swbci.org, societywithoutbarriers@live.fr
nobutaka.kamei@gmail.com

### 1.［第 1 部］手話言語と調査の概要（亀井）
#### 1. 1. 第 1 部の報告者と発表の目的

第 1 部として、共同報告者のひとりである亀井から、フランス語圏西・中部アフリカにおける手話言語と調査の概要の報告を行う [1]。

亀井は、文化人類学者であり、聴者である。1996 年に初めてカメルーンのヤウンデを訪れ、アフリカ現地調査を開始した。アフリカ社会の文脈におけるマイノリティたち（たとえば、熱帯雨林で狩猟採集生活を営む人びと、子どもたちと学校教育、障害をもつ人びとなど）の現地調査を行ってきているが、とくに 1997 年からは、カメルーンを始めとする西アフリカ、中部アフリカのろう者コミュニティにおいて、手話を習得し、それを話しながら現地調査を続けてきた。

これまで報告者は西アフリカの 9 カ国（西より、セネガル、ブルキナファソ、コートジボワール、ガーナ、トーゴ、ベナン、ナイジェリア、カメルーン、ガボン）を訪れ、各地のろう者コミュニティにおける現地調査を行ってきた。このうち、ガーナとナイジェリアの 2 か国およびカメルーン北西部は英語圏に含まれるが、カメルーンの国土の大部分を含めた 7 つの国々はフランス語圏である。これらの地域におけるろう者と手話言語の概要を観察し、報告してきた。

第 1 部の目的は、3 つある。第一に、アフリカにおけるアメリカ手話（以下、ASL）のインパクトおよびその背景について示すことである。第二に、フランス語圏西･中部アフリカにおいて用いられている手話言語名を定義し、提唱することである。第三に、ろう者の共同研究者とともに編集した手話辞典の例を示すことである。

#### 1. 2. フランス語圏アフリカにおける ASL の伝播とその背景

図 1 は、アフリカにおける ASL の影響が及んだ国々を示している。多くの地域に

わたっていることが明らかである[2]。

図１　アメリカ手話が伝播した国ぐに

図２　フランス語を公用語とする国ぐに

一方、図２は、フランス語を公用語のひとつとして用いる22の国々を示している[3]。図１と比較すると、多くのフランス語圏の国々にASLが拡散したことが理解できる。19世紀から20世紀にかけて行われたアフリカにおける植民地分割に、アメリカ合衆国は関与していない。植民地分割に関わりをもたないアメリカのASLが、フランス語圏アフリカになぜ拡散したのかを、以下では説明していく。

アフリカにおけるASL伝播の現象の鍵を握る人物が、アンドリュー・J・フォスター（1925～1987）である（写真１）。彼はアフリカ系アメリカ人のろう者であり、牧師であった。ろう者のためのキリスト教ミッション（Christian Mission for the Deaf、以下、CMD）の創設者であり、アフリカ各地でキリスト教布教とろう教育事業に取り組んだ。「アフリカろう教育の父」と呼ばれることもある人物である。

写真１　アンドリュー・J・フォスター（1925～1987）
写真提供：CMD

図３は、CMDが設立した学校の分布を示したものである。CMDは13の国々に合計31校のろう学校を設立し、４カ国にろう者のキリスト教会や日曜学校を開設した。フォスターは、世界で最多のろう学校を設立した人物であるとも言われている。

なお、これらの学校のうち、最初に設立されたのは、1957年のガーナ、アクラにおける学校であった。サブサハラアフリカで最初に独立を果たしたガーナの首都に、まさにその独立の年にいち早く開設されたのであった。

CMDのろう学校のネットワークは、アクラ（ガーナ）、イバダン（ナイジェリア）、アビジャン（コートジボワール）、ワガドゥグ（ブルキナファソ）、コトヌー（ベナン）、ロメ（トーゴ）、ダカール（セネガル）、ンジャメナ（チャド）、バンギ（中央アフリカ共和国）、キンシャサ（コンゴ民主共和国）、リーブルビル（ガボン）など、西アフリカおよび中部アフリカのほぼすべての主要都市をカバーするという壮大なものであっ

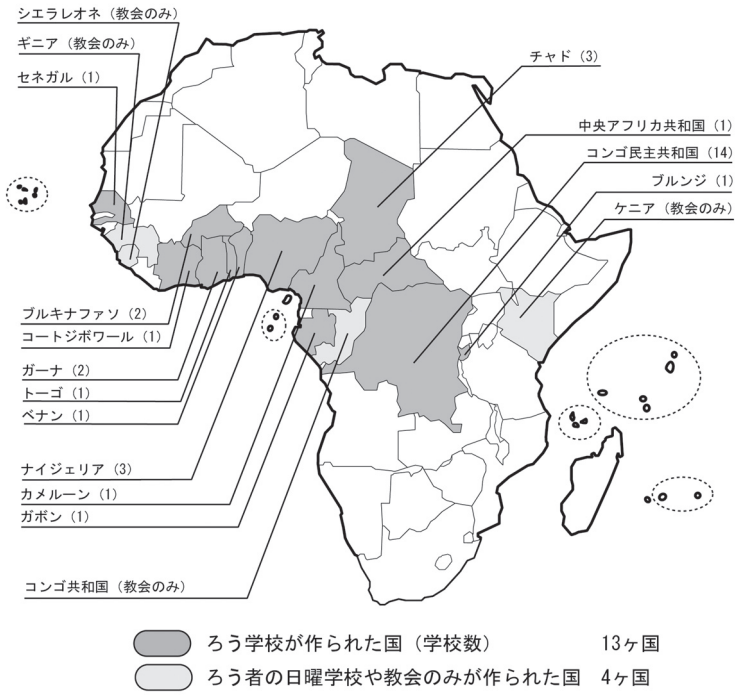


図3　CMD が活動した国々[4]

た。これら 31 校のうち、25 校までが、フランス語圏の地域に設立されていた。これは、全体の約 80%を占めている。

当時の教室の風景を示す写真がある(写真 2)。これは 1979 年にフランス語圏トーゴ共和国のロメで撮影されたものである。子どもたちは ASL に類似した手話を表現しているが、黒板にはフランス語による板書が行われている。このように、CMD の学校では、書記フランス語と ASL から借用された手話語彙があわせて用いられていた。

写真 2　トーゴ共和国ロメの
ろう学校の授業風景（1979 年）
写真提供：CMD

### 1. 3. CMD の人材育成事業

CMD のもうひとつの重要な事業は、教員の人材育成を行ったことである。フォスターが主催した教員研修に、合計 161 人の若いアフリカの人びとが参加した。研修生たちの出身は 19 カ国に及んでおり、また、実数は現在調査中であるものの、

参加者の多くがろう者であったと言われている。

図4は、161人の研修生たちの出身国を示している。この人脈は、学校の分布（図3）と並んで、CMDが構築することに成功したもうひとつのアフリカを覆う巨大なネットワークであった。フランス語を公用語とする国々のほとんどを網羅していることが、図2との比較から分かるであろう。

図4　CMDの教員研修生の出身国（19カ国）

フォスターは、このような国々の首都などの都市部を訪れ、研修に参加する人、とりわけ若いろう者を探して歩いた。各都市の教会や病院などを訪ねては、耳の聞こえない若者がいないかと聞き、その存在を知ると、自宅を訪ねたり教会に呼び出したりして、ナイジェリアでの教員研修に参加しないかと提案した。交通費も含めて、研修生個人における費用の負担はなかった。

小さなキリスト教団体が行う事業であったため、予算規模は小さく、研修中の食事はあまりよくなかったなどの事情はあったようであるが、チャンスを得た多くのろう者たちは、喜んでこの研修に参加した。

CMDは、マダガスカルなど、フランス語圏のさらに多くの地域での事業の展開も構想していたが、1987年のフォスターの死によってそれは実現しなかった。

この教育は、まさしく、ろう者たちによって営まれていた事業であった。主催者はろう者牧師のアンドリュー・フォスターであり、講師陣はベナン人のろう者教員たちであり、そして、研修を受けていたのは、ほとんどのフランス語圏アフリカを含む19の国々から集まってきたろう者と聴者の研修生たちであった。この研修生たちがやがて各自の出身国へ帰り、ろう学校の教員となった。

重要なことは、これらの教育活動が、おもにアフリカのろうの教育者たちによって営まれていたこと、そして、ヨーロッパによる植民地支配とは関わりなく、1960年代のアフリカ諸国の独立期以降に行われたという事実である。

### 1. 4.「フランス語圏アフリカ手話（LSAF）」の定義

ASL伝播のその後について見てみたい。ASLの語彙は、広く急速に、アフリカの都市部のろう者コミュニティの間で普及した。ろう者たちは、書記／音声フランス語の文法、つづり、口型を取り入れ、さらに、日常生活において自分たちが創った豊かな語彙をそこに加えていった。

この歴史を、図5のようにまとめることができる。独立以前に、植民地化の過程で、書記／音声フランス語がフランスからアフリカにもたらされた。一方、独立以降に、ろう者たちの教育事業のなかで、ASLがアメリカからもたらされた。これらの間における言語接触のなかで、アフリカに新たな手話言語が成立したのである。

報告者（亀井）は、アフリカにおけるろう者の共同研究者たちと何年にもわたって議論を重ねる中で、この言語を、ASL の方言としてではなく、アフリカのろう者コミュニティによって創られた新しい独自の言語であると認識するようになった。私たちは、これを「フランス語圏アフリカ手話（Langue des Signes d'Afrique Francophone、以下、LSAF）」と呼んでいる。

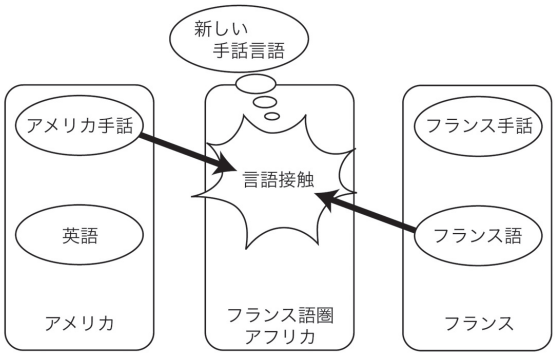


図５　フランス語圏アフリカにおける言語接触

ここで改めて、LSAF を定義する。

【定義】「フランス語圏アフリカ手話（LSAF）」とは、(1) アメリカ手話（ASL）からの借用語と、(2) 書記／音声フランス語の影響のふたつの特徴をあわせもつ、フランス語圏西・中部アフリカのろう者コミュニティにおいて用いられている手話言語の総称である。

言い換えれば、「アフリカにおいて ASL とフランス語の間で創られたクレオール手話言語の総称」と表現することもできる。このような観点に立ち、学術的な目的のみならず、教育的な使途も念頭に置きながら、この手話言語を記述する現地調査が求められている。

報告者はこれまでフランス語圏アフリカの７カ国を訪れて調査したが、国境を越えて、この LSAF が共通に使われている様子を観察することができた。一方で、その語彙には、若干のヴァリエーションも見出されている。このため、「LSAF」という総称を提唱しつつも、しばしば、地域名を伴わせ、LSAF の方言と位置づけて表現することをも始めている。たとえば、「フランス語圏アフリカ手話・コートジボワール方言（LSAF-CI）」「フランス語圏アフリカ手話・カメルーン方言（LSAF-Cam）」などの用例がある。

### 1. 5. フォスター没後のろう者コミュニティ

フォスター没後の状況について、少し触れておきたい。1987 年、フォスターは航空機墜落事故のためにルワンダで死去した。CMD は、各学校に対する予算を削減する措置をとり、アフリカの学校関係者たちは、困難な状況を受け入れることを余儀なくされた。

いくつかの学校は政府によって国有化されたが、私立学校のまま続けられたものもあった。聴者の教育者による運営に移行したものもあれば、ろう者の教育者が継続したものもあった。発展を遂げた学校もあったが、一方で、内戦や経営難が原因

となって閉鎖されてしまった学校もある。これらの学校のそれぞれの行く末を丹念にたどっていくと、ろう者コミュニティのエンパワーメントのあり方にもさまざまな岐路があったことが分かる。

CMD は基本的に、おもにろう者の教育者たちが運営する私立のミッションスクールとしてそれぞれの学校を開始した。その後の歴史を、「ろう者主導か／聴者主導か」（前者の例はナイジェリア／後者の例はブルキナファソ）、「政府主導か／私立学校主導か」（前者の例はコートジボワール／後者の例はカメルーン）などの指標に基づいて分類し、それぞれの成果と課題を検討することができる。アフリカろう者コミュニティの歴史を明らかにし、これらの点に着目しながら比較研究を進めていくことが期待される。

### 1. 6. LSAF の辞典編集：カメルーンとコートジボワールの事例

ASL をルーツのひとつとするフランス語圏アフリカの手話が、LSAF というひとつの独立した言語であるとの認識に立つならば、まずはその記載を行うための調査が必要である。いくつかの辞典編集の試みについて紹介する。

まず、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所の事業として、カメルーンにおける辞典編集のプロジェクトを実施した（2007 年～ 2008 年）。2007 年に着手、2008 年には、最初の DVD 動画辞典が完成した（亀井 2008, 亀井編 2008）。日本語とフランス語の 2 言語による検索に基づいて、LSAF の動画を再生できる電子辞典である。

全体で、約 3,300 件（総時間数：7 時間 40 分）の動画から構成されており、その中には、単語の検索ができる「辞典部門」（約 2,600 語）、スキット教材を通じて LSAF の習得ができる「教材部門」（約 450 例文）、あいさつなどの日常基本会話を収録した「会話部門」（約 110 例文）、人称や時制、文型について体系的に学べる「文法部門」（約 150 例文）、ろう者 2 人の自由な会話を通じて読み取り練習ができる「自由会話部門」（2 件）が含まれている。

同事業の終了後、次にコートジボワールにおける LSAF の辞典の編纂に着手した（2008 年～現在進行中）。

2008 年に、コートジボワールで LSAF の辞典編纂のアイディアが検討され始めた。2009 年、同国のアビジャンにおいて、ろう者の共同研究者たちとともに調査研修を開始した。手話の記載に関心をもつろう者たちとのワークショップを重ねたのである。

2012 年に、最初の辞典がアビジャンで出版された（本稿 2. 3. および写真 3 参照）。フランス語からフランス語圏アフリカ手話・コートジボワール方言（LSAF-CI）のイラストを検索できる書籍である。これの日本語・英語対訳付きのバージョンを現在準備し、また、DVD 動画辞典の映像編集を進めている。

このような、アフリカのろう者たち自身による辞典の編纂がいっそう進むことが期待される。

### 1. 7. 第 1 部のまとめ

第 1 部をまとめたい。ASL はフランス語圏西・中部アフリカに広く普及した。ただし、

これはヨーロッパによるアフリカ分割・植民地化の帰結ではない。おもにアフリカのろう者たちによって、アフリカ諸国の独立期以降に行われた、キリスト教宣教活動の結果である。

アフリカのろう者コミュニティは、ASL の語彙、書記／音声フランス語とアフリカ独自の語彙を用いつつ、新しい手話言語を創った（LSAF）。この新しいアフリカの手話言語について、学術と教育の両方の目的のために、主としてアフリカのろう者たち自身によってさらに記載的な研究が進められる必要がある。

第2部では、もうひとりの共同報告者であるコートジボワールのろう者、サノゴ・イェデ・アダマが、地域での具体的なろう者による取り組みについて紹介する。

## 2.［第２部］西アフリカにおけるろう者コミュニティの言語権の促進：手話言語研究の分野におけるろう者の役割とは？（イェデ）

### 2. 1. 第２部の報告者と調査地

第２部では、コートジボワールを中心としたろう者による調査の取り組み事例を報告する。

報告者（イェデ）は、ろう者である。かつて、国際協力機構（JICA）と障害者インターナショナル日本会議（DPI-Japan）が実施したアフリカの障害者研修プログラムに参加した経験がある。現在は手話講師であり、障害者の社会統合のためのアドバイザーであり、コートジボワールにおける手話の振興のアクションプランのコーディネータをしている。

私たちの調査地は、フランス語圏西アフリカである。コートジボワールで調査を進めてきたが、2013 年から 2014 年にかけて、ブルキナファソ、トーゴ、ニジェールにおいても調査経験を重ねてきた（図 6）。

図 6　西アフリカにおける手話研究の取り組み

### 2. 2. 調査地で共通するろう者の課題

フランス語圏アフリカのろう者は、教育、情報、保健、職業訓練、雇用へのアクセスにおいて、多くの困難に直面している。

これらの国々では、ろう学校が１国に多くても５校程度しかなく、今日に至るも、主なろう学校とは、1974 年以降にフォスターが設立した学校である。大部分のろう児たちが、学校に通えていない。また、小学校に通った若いろう者たちも、中等教育での受け入れ態勢が整っていないために、小学校卒業後のさらなる進学を断念している。この地域では、ろう者が基礎教育を受ける権利を享受できていないのである。

世界ろう連盟（WFD）の世界の人権に関する報告書によれば（Haualand and Allen 2009)、「手話通訳」「バイリンガル教育」「アクセシビリティ」「手話」といった複数の要因のどれかひとつでも欠けてしまったら、ろう者の人権は十分に保障されないとされる。そして、「手話」はその中核に位置する要因である。

フランス語圏西アフリカにおける手話の研究は、ろう者の教育、情報、保健、職業訓練、雇用へのアクセスの状況を改善することに寄与するであろう。しかしながら、この地域での研究はほとんど存在していない。手話研究が欠落していることは、ろう者の教育と職業訓練へのアクセスがないことの要因のひとつであると指摘できる。私たちは、2009 年からこの状況を変えるべく、取り組みを始めている。

### 2. 3. 調査の進め方とおもな成果

図 7 をご覧いただきたい。中央に、私たちろう者コミュニティがおり、手話研究チームがある。そこへ海外の研究者（左上）が関わって、研究とエンパワーメントを行う。また、地元の研究者たち（右上）からのアドバイスも受けている。さらに、提携者の存在（右）も重要で、技術的、資金的支援を受ける。

こうした体制のもとで、第一の成果として、学術的な研究成果が生み出される（下から 2 段目)。また、そこから派生する形で、ろう者の生活状況に変化がもたらされる（最下段)。

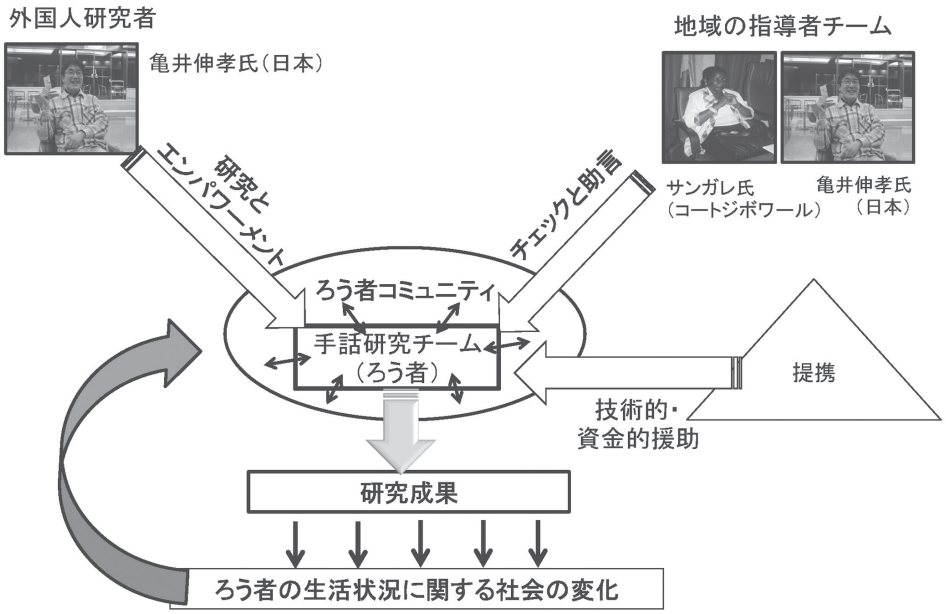


図 7　ろう者による手話研究チームと取り巻く関係者（模式図）
亀井は現地滞在中に地域の指導者の一員としても関与している

このような学術的および社会的な成果が、ふたたびろう者の研究チームにフィードバックをもたらし、新しい研究と成果へとつながっていく。この循環を作り出すのである。その中心には、現地のろう者コミュニティの存在がある。

成果として、まず 2010 年～ 2012 年に、基本語彙集を作成し、コートジボワールで初めての手話辞典の刊行を行った（Sanogo, ed. 2012）（写真 3 左）。また、2013 年～ 2014 年には、手話のバイリンガル教材の開発にとりくみ、コートジボワール初の手話の教本を完成させた（Sanogo 2014）（写真 3 右）。

コートジボワールのろう者の手話研究チームは、手話の教材を作成する実践的なノウハウを自ら編み出し、他の国々における手話の教材開発にも貢献している。その国々とは、トーゴ、ブルキナファソ、ニジェールである（SWB-CI ed. 2014a; 2014b; 2014c）（写真 4）。これらの事業は、ヨーロッパ連合（EU）の助成を受けている国際 NGO の CBM の支援によって進められた。このプロジェクトは、ろう者が職業訓練と雇用にアクセスする権利を促進している。

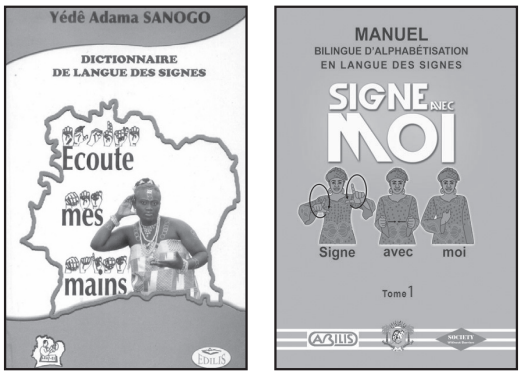


写真 3　コートジボワールで刊行された書籍
（左）手話の辞典　（右）手話の教本

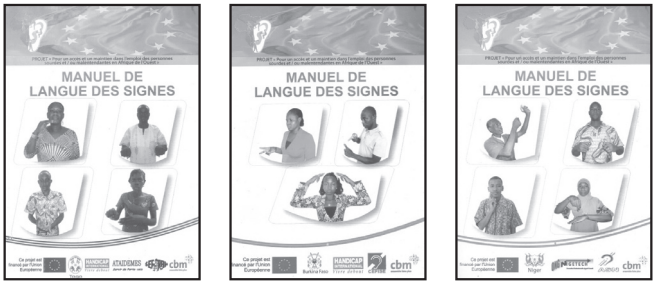


写真 4　近隣諸国で刊行した手話の書籍
（左）トーゴ　（中）ブルキナファソ（右）ニジェール

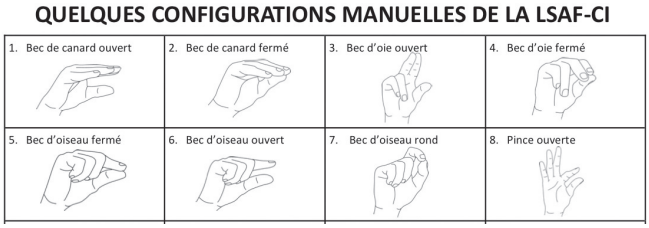


図 8　LSAF-CI の手型分析（一部）

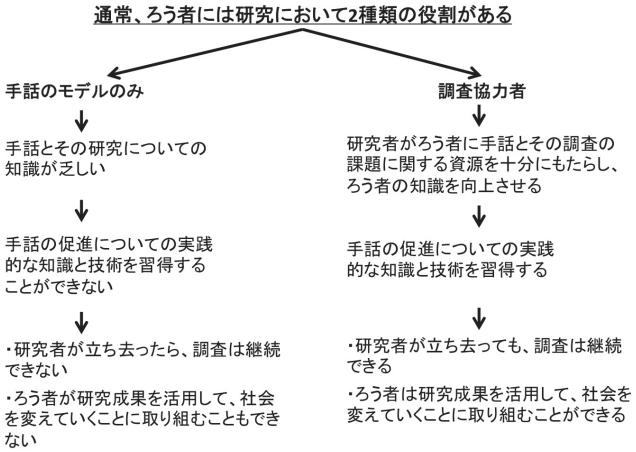


図 9　研究におけるろう者のふたつの役割 [2]

現在進行中の調査として、1 つ目に、LSAF の手型分析がある。26 のアルファベットの指文字および 2、3、4、5 などの数の手型に加え、LSAF コートジボワール方言（LSAF-CI）は、おおむね 40 種の手型を用いている（図 8）。

2 つ目に、教育分野の LSAF-CI の基本語彙集を作成することである。これは、学校の教員のための手話研修における教材とプログラムを改善するのに役立つはずである。

## 2. 4. 調査におけるろう者の役割とは

通常、ろう者には、調査において 2 種類の役割がある。「手話のモデルのみ」と「調査協力者」である。

「手話のモデルのみ」の場合（図 9、左側）、ろう者は手話とその研究についての知識が乏しく、手話の促進についての実践的な知識と技術を習得することができない。また、研究者が立ち去ったら、調査は継続できなくなる。ろう者は研究成果を活用して、社会を変えていくことに取り組むこともできない。

一方、「調査協力者」の場合はどうだろうか（図 9、右側）。研究者がろう者に手話とその調査の課題に関する資源を十分にもたらし、ろう者の知識を向上させる。手話の促進についての実践的な知識と技術を習得する。研究者が立ち去っても、調査は継続できる。ろう者は研究成果を活用して、社会変革に取り組むことができる。

言うまでもなく、私たちは「調査協力者」の立場を選択している。

### 2. 5. 第 2 部のまとめ

コートジボワールの経験から、私たちは以下の結論を述べることができる。

研究を通じてフランス語圏西アフリカのろう者の社会的状況に変化をもたらす最善の方法とは、「ろう者たちが手話の研究に参加する機会を増やすこと」である。つまり、ろう者に手話の撮影のモデルの役割をさせるだけでなく、あわせて、ろう者の言語権の促進や手話の教材開発に役立つ実践的な技術を提供するということである。

研究者におけるもっともよい実践とは、ろう者たち自身が主導する地域の手話調査チームを組織することだと考えている。この実践は、その地域社会においてろう者のエンパワーメントを達成することに寄与する。

「世界のすべての人たちが、障壁なく、その言語権を享受できるために」。私たちは、このことを目指している。それを考えた場合、地域のろう者による研究体制の確立とは、持続可能性という点でも重要な課題であることだろう。

## 3. ［まとめ］今後の展望と課題（イェデ／亀井）

アフリカ域外から調査に訪れる聴者の研究者が、アフリカのろう者コミュニティに関わるときの立ち位置について触れておきたい。

専門的な知識や調査法をもたらすことは、むろん重要である。一方、たとえばパートナー団体を探し、財源獲得のための計画申請のノウハウを共有することなども重要である。このほか、報告者（亀井）の経験では、役所との交渉をしたり、大学や社会における啓発の役割を引き受けたりなど、「純然たる調査者」の域をはみ出して活動することも必要になることがある。その意味で、フィールドワーカーは現場において多才な人材であることを求められているとも言えるかもしれない（小國・亀井・飯嶋編 2011）。

フランス語圏アフリカにおいて広く用いられている LSAF については、その共通した基本的特徴を尊重しつつも、同時に、各地における多様性にも注意を払うことが必要である。このため、各地のろう者たちによる自律的な研究がそれぞれ促進されることが望ましいと私たちは考えている。そして、アフリカ大陸における各地の成果を相互に参照し合い、共有することが望ましい。

現在、私たちは以下のような構想を検討し始めている。第一に、「フランス語圏アフリカ手話研究所（Institut de Recherche sur la LSAF）」の設立。第二に、ろう者と聴者（主にはろう者を想定した）の研究振興のための研修の実施。第三に、フランス語圏アフリカ手話国際会議（Conférence Internationale sur la LSAF）の開催と研究者ネットワーク作りである。

いずれも、ろう者と聴者、アフリカ域内の人とアフリカ域外の人、地域の人びとと大学人、多くの人たちの包摂的な参加を促しながら、少しずつ実現のために準備を進めている。アフリカのろう者たちにおける、自律的かつ統合的な研究の協力体制を実現するために。今後も、ともに歩みを進めていきたい。

**謝辞**

本研究のもととなる調査は、複数の日本学術振興会科学研究費補助金により行われました。コートジボワールの手話調査グループ、カメルーンの手話調査グループ、この他、アフリカにおけるすべてのろう者と聴者の共同研究者のみなさま、第 8 回世界アフリカ言語学会議（WOCAL8）の実行委員会、とくに実行委員長・梶茂樹氏、事務局・神谷俊郎氏、手話分科会主催者・宮本律子氏、手話通訳コーディネータ・秋山奈巳氏、手話通訳団各位、全体講演に参加くださった聴衆のみなさまにお礼申し上げます。最後に、『手話学研究』への寄稿の機会をくださった学会誌編集委員長・森壮也氏を始めとする日本手話学会関係各位に対し、謝意を申し述べます。

**注**

[1] 本稿は、第 8 回世界アフリカ言語学会議（the 8th World Congress of African Linguistics (WOCAL8)、2015 年 8 月 20 日～ 24 日、京都大学）のプログラムの一環として行われた共同講演「全体講演 3」の内容を、日本語に改めたものである。当日の講演は、英語のスライドを用いつつ、音声英語およびフランス語圏アフリカ手話（LSAF）によって行われ、日本手話にも通訳された。

【原題】Plenary talk 3: "Promotion of sign language research by the African Deaf community: The cases in West and Central French-speaking Africa" by Sanogo Yédê Adama (Director, Society Without Barriers – Côte d'Ivoire (SWB-CI), Côte d'Ivoire) & Kamei Nobutaka (Associate Professor, Aichi Prefectural University, Japan)（2015 年 8 月 23 日（日）9:30 ～ 10:30、京都大学百周年時計台記念館にて実施）。

[2] 本稿で引用した CMD の歴史に関するデータと図は、いずれも亀井（2006）に基づく。2015 年現在の実勢を反映させ、一部改変を行っている。以下同様。

[3] 公用語の呼称は国によって異なり、ここでは、「国語（langue nationale）」「公用語（langue officiele）」など、政府によりフランス語が公認されているものを含むことにする。また、カメルーン（フランス語と英語）、赤道ギニア（スペイン語とフランス語）のように、複数の公用語の中にフランス語が含まれるケースもある。

[4] ここでは、フォスター存命中に設立された 31 校に加え、彼の没後にコンゴ民主共和国に設立された 1 校を含めた計 32 校が図示されている。

## 参考文献

Haualand, Hilde and Colin Allen (2009). *Deaf people and human rights*. World Federation of the Deaf and the Swedish National Association of the Deaf. (http://www.wfdeaf.org/wp-content/uploads/2011/06/Deaf-People-and-Human-Rights-Report.pdf accessed on September 4, 2015).

亀井伸孝 (2006).『アフリカのろう者と手話の歴史 : A･J･フォスターの「王国」を訪ねて』東京 : 明石書店 .

亀井伸孝 (2008). *On va signer en Langue des Signes d'Afrique Francophone!* 府中 : 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 .

亀井伸孝編 (2008). *DVD : Langue des Signes d'Afrique Francophone (LSAF)*. 府中 : 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 .

小國和子・亀井伸孝・飯嶋秀治編 (2011).『支援のフィールドワーク : 開発と福祉の現場から』京都 : 世界思想社 .

Sanogo, Yédê Adama ed. Superviseur : Kamei, Nobutaka (2012). *Ecoute mes mains: dictionnaire de langue des signes*. Abidjan, Côte d'Ivoire: EDILIS.

Sanogo, Yédê Adama (2014). *Signe avec moi : manuel bilingue d'alphabétisation en langue des signes, Tome 1*, Abidjan, Côte d'Ivoire: EDILIS.

Society Without Barriers - Côte d'Ivoire (SWB-CI) ed. (2014a). *Manuel de langue des signes, EFTP-Burkina Faso*, Lomé, Togo: CBM.

Society Without Barriers - Côte d'Ivoire (SWB-CI) ed. (2014b). *Manuel de langue des signes, EFTP-Niger*, Lomé, Togo: CBM.

Society Without Barriers - Côte d'Ivoire (SWB-CI) ed. (2014c). *Manuel de langue des signes, EFTP-Togo*, Lomé, Togo: CBM.

*Japanese Journal for Sign Language Studies*
*Volume 24, 3-16, 2015*

# Promotion of sign language research by the African Deaf community: Cases in West and Central French-speaking Africa

**Sanogo Yédê Adama[1], Nobutaka Kamei[2]**
**[1]Society Without Barriers - Côte d'Ivoire (SWB-CI),**
**[2]Aichi Prefectural University**
swbci@swbci.org, societywithoutbarriers@live.fr, nobutaka.kamei@gmail.com

**ABSTRACT**

This article is based on a draft of the joint plenary talk by the two authors at the 8th World Congress of African Linguistics (WOCAL8) held on 23 August 2015 at Kyoto University, Japan. In Part 1, Kamei, a Japanese hearing cultural anthropologist, reports the general situation of sign languages in West and Central Africa. Although most of the countries in these areas use French as their official language, we observed the influence of the American Sign Language (ASL) vocabulary. Historically, Andrew J. Foster, a Deaf African-American pastor, and his Deaf African colleagues conducted missionary activities. Through their activities after the independence of African countries in the 1960s, urban Deaf communities created a new creole sign language using the ASL vocabulary, written/spoken French, and African indigenous signs. We recognize that it is not a dialect of ASL, but an independent sign language created by African Deaf communities. This article proposes a new name for this language: "Langue des Signes d'Afrique Francophone (LSAF)". In Part 2, Yédê, a Deaf researcher and sign language instructor in Côte d'Ivoire, presents his experience with collaborative research in West Africa. In 2009, we started research training workshops for Deaf people in Côte d'Ivoire and established a Deaf research team. It has already published the first sign language dictionary in this country and textbooks in Togo, Burkina Faso, and Niger. If Deaf people continue to be the "signing models" for hearing researchers, the research cannot continue when the researchers leave. However, if Deaf people are well trained and become "researchers" themselves, they can continue to study and use the results of research to advocate for linguistic rights for the Deaf. In conclusion, we show future perspectives for autonomous and united research collaborations among local Deaf research teams in West and Central Africa.